



十河雅典、ステップス五度目の個展である。今回十河は画廊入口に《旗》(木・布にアクリル/130×60 cm)、《国亡軍》(布にアクリル/60×72 cm)、画廊内に縦 226 cm、横 810 cm に及ぶ《曾て美しい憲法があった》(キャンバスにアクリル)、《しりとりうた A・B・C》(キャンバス・和紙にアクリル/145.5×100 cm)、事務所に《醜团的自栄権行死》(キャンバスにアクリル/53×71 cm)、《せんぜんせんご》(紙にミクストメディア/15×31 cm) 計 6 点を展示した。

十河は政治経済を主題にしている。それは今回の作品を見れば解ることだ。美しい憲法が改正されようとしている、集团的自衛権が行使された、sony, yen, Nippon, not, Toyota, ants という企業、貿易、働き蟻の日本人のシロトリ、変わることのない戦前と戦後。それは十河のこれまでの作品のスタイルでもあり、これからも変わらないであろう。十河は法律と状況が変わる毎、作品に日本人の愚行を塗りこめる。戦争反対や平和維持という生ぬるいものではない。十河は現状に対し怒りとルサンチマンを噴出して、絵画をぶちまけるだけではあるまい。この「怒り」だけで、美術は成立しない。何らかの法則と技術、目的と意図が伴うからこそ芸術として成立し、多くの人々の心に響き、いつまでも作品として存在し続けるのだ。十河の作品の法則は、政治的だ。当然ながら、技術は凄い。目的は、自己を含む人間全ての自覚だ。意図は、世間の目を覚まさせることであろう。絵画として立脚している。

それでも十河を語るのに、何かが足りない。もっと深い考察が必要だ。政治的で、自己を反省し、他者の目を覚ませる。その為に、十河は「人間の業と教義」を示しているのではないだろうか。人間が如何に愚かで、大量殺戮を受けようとも変わることなく、利己主義で、強欲になっていくことを、人間、日本人という枠を超え、人類の蛮行として、壁画に描いているような気がするのだ。失われた世界に壁画は掘り起こされる。それは何時の日のことか。

《曾て美しい憲法があった》を見ていると壁画は勿論、墓碑若しくは絵巻にすら見えてくる。私は「戦後 70 年記念 浜田知明のすべて」展(8月1日-9月13日/熊本県立美術館)展評を「週間新聞新かながわ」9月20日号に投稿した。私は「加害者でもありながら被害者でもある浜田が表す人物は、自己と他者という単純な二元論を」超えていると書いた。これは単なる一例なのだが、十河は浜田と全く逆に、自己を徹底的に主観として絵画に投じるのだ。そのため十河の作品は、十河個人を超えて十河ではなくなり人類の蛮行に溶け込まれていく。このような技法を用いる美術者は他にいるのだろうか。主観の果てに、自己を投棄し、喪失する。それは焼身自殺による訴えにも近いのかも知れないが、十河は美術者である。既成の自(美)意識を突き破るモンタージュの技法(針生一郎/ジョン・ハートフィールド)を用い、完膚なきまでに自己を突き破って自己を革新するのだ。これからの十河の更新もまた見たい。

